

介護度が変わるって どういうこと？ 本音で話せば



執筆 ▶ 葉山 靖明 ● (株)ケアプラネット
「デイサービスけやき通り」代表取締役

先月は、介護保険証を初めてもらったときの心境について書きました。今月は、「介護度が変わったとき」のことを書こうと思います。私には、要支援1、要支援2、要介護2という3つの介護度の経験があります。最初は週2回のデイサービス、その後訪問リハへ移行。最初の認定から約3年で、介護保険を申請しなくなった“卒業者”の事例として読んでいただければ幸いです。



要支援2→要支援1 自立に近づいたのに複雑

まずは、要支援2から要支援1になった「介護度が下がったとき」の話から。

やはり、それはショックでしたね。デイサービスが週2から週1になったと記憶しています。関節可動域訓練などのリハビリの必要性から、とても困りました。しかし、これについては、「介護度は低くなった方が健康な証拠、リハビリ訓練を頑張った証拠だから喜ばしいこと！」という私の年上の友人もおられました。

また、このような介護度が下がった場合の家族は喜ぶべきか哀しむべきか、レスパイトが絡んでの微妙な心理であり、言語表現しにくいシチュエーションでした。

人間というものは、意外に一定の価値基準を持っているものではないと気づかされました。あれほど、最初は介

護保険を使う（認定される）立場が嫌だった私が、保険を使う程度（介護度）が低くなったということは、プラスの感情につながるはずで、喜怒哀楽でいう、「喜、楽」の方だと思ったら、「怒」とまではいかななくても「哀」なのです。全く論理的ではありません。

介護度は客観的な？心身機能等の評価であるとともに、②保険サービスを受ける量の権利でもあると思います。前述の年上の友人は、①を重視、私は②を重視なのでしょう。介護仲間の中では、やはり②重視の人の方が多かったように記憶しています。

無論、限度額まで使っていた方であれば、使える介護サービスが使えなくなるのですから、「哀」以上の「困る！」です。



要支援2→要介護2 うれしい心の裏にある心理

逆に、要支援2から要介護2へと「介護度が上がったとき」の話。

これは、うれしかったですね。権利を一つから二つに増やしてもらったような気分でしたね。私の場合、デイサービスに週2で通っていて、介護度が上がっても週2だったのですが、正直な心境は、「喜」でした。単価が上がることは、1割にすると少額なので気にしませんでした。

それと、前述の①心身機能等評価として、「上がった」→「重い」→「頑張っている」→「報われない…」とい

葉山 靖明 はやま やすあき
1965年福岡県生まれの50歳。専門学校で法人税法及び簿記論の講師を務めていた2006年、40歳のときに左脳の脳内出血発症し右片まひに。翌年それまでの職場を辞して(株)ケアプラネット設立。現在は、デイサービス経営のかたわら講義・講演活動を継続中。社会福祉法人「夢のみずうみ村」役員。人間科学修士

要支援⇒要介護で
なじみのケアマネ
さんが変わるのも
苦痛でした

		内 容		期 間	
給 付 限		開始年月日	平成	年	月 日
		終了年月日	平成	年	月 日
		開始年月日	平成	年	月 日
		終了年月日	平成	年	月 日
		開始年月日	平成	年	月 日
居宅介護 支援事業 者又は介 護予防支 援事業者 及びその 事業所の 名 称		ケアプランサービス			
		届出年月日平成20年11月1日			
		ケアプランサービス			
種 別 保 険 施 設 等		届出年月日平成19年1月1日			
		地域包括支援センター			
		届出年月日平成18年7月1日			
介 護 保 険 種 別 等		入所等年月日平成	年	月	日
		退所等年月日平成	年	月	日
		入所等年月日平成	年	月	日
		退所等年月日平成	年	月	日

う若干ではありますが、「悲劇のヒロイン型思考」や「頑張っている人と世間から見られたい願望」にもつながったと思います。

それは決して言語表出しないし、アンケート調査しても書かれることはありませんが、深層心理としてあると思います。誰かに訴えと言ったソト向きの感情ではなく、飲み殺すような内向きの感情であって、フォーマルな介護アセスメントからすると、本当に“若干”でしょう。しかし、その「若干の部分」がミソなのかもしれません。そこに意外に本音や訴えや感傷が含まれていて、要介護者の哀しき心境なのかもしれません。ケアマネさんが知っておくべき心理部分でもあり、本人が共有してほしいところなのかもしれません。



デイやサロンが大事なのは 社会参加=生きることだから

結局は、デイサービスの機能の何を

頼りにしているのか？という部分が、問題なのでしょう。当然、法の上では入浴、食事、機能訓練など「介護」ですが、実際には、ICFの「社会参加」がとても重要です（もう、法の理解の上でも「社会参加」が重要という時代になっていますね）。

私自身、42歳の4カ月のエアポケットのような無職時代に、メールが全く来なくて、デイサービス以外の予定はほとんどなく、友人はみな会社に行って忙しそうで、どれほど「社会」が恋しかったかは、容易に想像していただけたと思います。ICFの「活動」は家で一人でもできますが、「社会参加」はやはりデイサービスに行く、人に交わらないとできません。

魚が「水」の中でのみ生きることができるよう、人間は「社会」の中でのみ生きていける動物だと、私は思っています。

今、要支援者や“卒業”者を対象とした、サロンや教室等、地域の社会資源の充実が進められています。それ

が実現することによって、人として生きることができ、生活する自分を取り戻せるようになってくれたらと思います。

私自身は、こうやってケアマネさんをはじめ、皆様方のおかげで社会人に戻ったことで、「ああ生きてるな!」と有難味を感じながら、介護度が下がって複雑な気持ちになったり、飲み殺すような内向きの感情を持ったりしたことも、「あんなこともあったね!」と客観視できるようになりました。

要介護⇒自立への“卒業”というのは、介護保険や社会保障の制度がどうこういう以前に、「ひと」が社会の中で生きてゆくとは何かの本質の中に答があるように感じます。

今月の私

大雪の中でも学会参加、マジ?な2人

1 月下旬、大寒波がわが九州をも襲いました。しかし、大雪もなんのその、大分市で開催された「第19回大分県作業療法学会」に、福岡から参加してきました。

写真の左の素敵な女性は私の友人であり、別府市の「NPO自立支援センターおおいた」のスタッフ折田聡美さんです。車は彼女のマイカー。大雪の中、自分で運転して会場まで来ていた勇氣には驚きました!

「学会」というと学生のみが参加と思



いがちですが、ここではオープンに一般の人もOKであり、われわれ障がい当事者2人も参加し、学び、そして大雪の中を2人でドライブしながら帰路につきました。良い時代になったものです。

「学会が良いの? ドライブが良いの?」といわれれば、両方ですよ! そのドライブはとても楽しく、まるで未来のインクルーシブな社会へ向かっているようでした。(^^)